

歌と感情の未分化

October 19, 2012 / text : 石井孝浩 (Fool's Mate)

いまだZ.O.Aのイメージを強く持っている者には衝撃的といってもいいほどのヴォーカリゼーションで幕開ける。新バンド、血と雫はものすごく低いところからざわざわとした肌触りを波動のように伝えながら、破裂寸前で息を止める。この間がとても重い。

森川誠一郎の歌声は変わりなくハスキーだけれど、最初は泣いているようなバルネラビリティ指数を高く響かせ、やがてじわじわと熱を帯びた攻撃性をまもっていく。

山際英樹のギターはまるで耳のすぐそばでゴツゴツ鳴らしているかと思うと次の場面ではエコーを棚引かせながらリリカルに余韻を拡げ、高橋幾郎はグルーブやリズムキープのレベルとは別にスティックを彫刻刀のようにリズム・スカルプチャーを形成していく。

M-4「夜曲」ではいかにも雅な和風メロが歌われるが、このファースト作は総じてほとんど何らかの構えをとることなく知らず知らずに曲は始まり音が止まる。すべてがインプロのようにありながらひとつひとつの音、ひとつひとつの音と音の隙間に精緻で微細な力が働いているようで、それはリビドーのカヴァーであるラスト・ナンバー「my private sun」で際立った叙情の強度に収斂していく。歌と感情の未分化はおそらく理想であり根源だが、そのバランスをとることができるのは稀だ。このアルバムの歌にはいささかの危うさを伴いながらもそれがある。